

西真寺 寺報

令和元年 冬号

住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念仏相續に御精励のことと、お喜び申し上げます。

十月十三日の当山報恩講を無事終え、台風の影響により予定していた竹灯籠祭りが中止となり、まだ台風十九号の被害状況が把握できない不安な心持ちのまま、十月十六日からの二泊三日で「本山西本願寺お参りと世界遺産の旅」に往って参りました。

本山の世界遺産、書院群をはじめ、工事中にも関わらず飛雲閣を観ることが出来き、感動をご門徒さんと共有できたことは、大変貴重な時間であり、歴代住職とこれまで当山を支えて頂いた歴代のご門徒さんの願いのご縁でもあります。

また、広隆寺で秦野河勝と聖徳太子を結ぶ国宝第一号の弥勒菩薩の半跏思惟像にドイツの哲学者ヤスパースと同様に魅せられ、(ヤスパースは世界で一番美しい仏像として称賛) 在家仏教の原点と京都の都の礎を知り、東山で哲学の道を歩み西田幾多郎や梅原猛の思いを感じながら、延暦寺で親鸞聖人の自力無功を知り、最後は当山開祖の師、教如上人の真宗大谷派 大通寺をお参りして、秀吉を巡る東西本願寺との関わりを考える機縁を頂きました。

東西本願寺を分け隔てない、信楽焼きに反映されるような地域信仰に触れたことは、これすなわち「信楽」(しんぎょう…信心)を深める旅となりました。

南無阿弥陀仏

釋直徳

■影を内に観るか外に観るか④

① 天皇崇拝 (清僧願望)

穢れ意識も死体に対する恐れが禁忌となり、天皇の聖性を高めるための観念として、上から押し付けられる上意下達じょういかたつの形式で発達してきました。

戦前、天皇崇拝に至る人為的かつ恣意的しいてきに行われてきた政治支配神話は、穢れを忌む心としての元型的イメージのはたらきによる現象と考えられます。

僧侶に対して、自分たちが出来ないこと(例えば苦行)をイメージし、過度に理想化し、理想の姿を投影する一方で、その願望に反した場合、「クソ坊主」という汚れた記号に変わるのは何故でしょうか。

これは「価値切り下げ」(脱価値化)だっかちかという原始的防衛機制のひとつで、理想化し、万能的な期待が満たされずに、思い通りの結果に至らなかった場合、全価値を下げ過少評価に転ずるという乳幼児特有の投影です。

このように、清浄しじょうじょうなるイメージの投影が天皇崇拝に結びついていくのです。この現象もクライン、マの乳幼児における「分裂」と「取り入れ」、そして「同一化」の過程から生じると、考えられます。

古来より、神道に伝わる靈魂に依る神祇を祀り、穢れを祓う思想習慣を正当化することで、国家体制を支え、天皇を権力の頂点(本)とし、臣民を「迹」とする神仏習合、すなわち「本迹思想」

(解説①) となり、鎮護国家が成立しています。

本迹思想における「本」とは、全ての基本を指し本質そのものを示します。「迹」は、その「本」に依存することで実在するもので、「本」は「迹」を無条件にその全体に包括する意味を成します。

鎌倉時代の荘園制社会での仏教イデオロギーは、年貢を納めることが善行を意味し、往生を決定する要因となり、仏教が農民支配に利用されていました。

この日本仏教による全体主義による体制的イデオロギーは、「国体」という思想、つまりその淵源を万世一系の天皇にあるとしての「尊皇攘夷」思想に寄与したのです。

しかし、親鸞は、仏教は民衆支配の道具になってはならないと考え、この儀礼的「習慣」を否定し、神に依らず、権力に媚びない、そして俗と同じ立脚地にある「如来より賜る信心」を菩提心として、現世における平等なコスモロジーを民衆の側に開いていった独立者であったのです。

② 靖国問題

天皇の残像を象徴的に表象しているのが、祭式を習慣化した靖国です。しかし、平成の天皇は靖国を参拝することはありませんでした。それは単にA級戦犯が合祀されているという理由だけなのでしようか。

日本における古来に始まり現在に至る神と人間のあいまいなあり方は、政教分離という叡智さえも形骸化させ、戦争を正当化する為に戦死者を英霊として顕彰しています。

戦場における戦死者の靈魂は、愚劣で自ら浄化できない為に、その不浄なる肉体を天皇に捧げ尽くすことで靖国に祀られているのが靖国のあり方です。

それは、天皇の従属兵士の為に作られた神社であり、設立当初、戊辰戦争で亡くなった官軍のみを祀る朝廷の為の神社でありました。その為、実際は陸・海軍の為の軍事施設であり、顕彰施設なのであります。

ここでいう天皇とは、穢れを除去する能力を持つことが前提であり、戦死者の劣った霊を国家が支配するという優生的な全体主義の機能を持つのが靖国なのです。

靖国が温存する観念とは、軍国主義や侵略側、つまり殺す側の論理に基づいており、英雄像と聖者像による秩序性を保持する投影は、呪術性に特徴があります。

靖国の呪術性とは、自分たちには出来ない強者や勝者などの、極端に理想化された英雄イメージを靖国に観ることで、一体化され、一時的な安心を得ているだけの投影による作業を指します。

実際は「聖戦で死んだら靖国に祀って参拝してやるから安心して死んで来い」つまり、「靖国神社による戦死者の魂独占の虚構」(内田雅敏)こそが靖国の本質です。

この投影には、戦死者が望む本当の願い——世の中安穩あんのんなれ——を実現し、遺族を根底から癒す展望が見受けられません。

また、戦後補償されない原爆・空襲被災者や日本兵として戦死した旧植民地出身者の排除、信教の自由の略奪などの理不尽さ、遡れば会津藩・奥・羽・越列藩同盟の戦死者の排除などは、靖国の英雄像工作の為の呪術によって隠されている真実です。

いつの世も偽善の宗教者は、世俗の権力を欲しがり、権力者は、宗教による民衆の統治力を欲しがるのです。この両者が結合することで歴史上必ず戦争が起こっている真実は絶対に忘れてはならないのです。だからこそ、憲法には信教の自由と政教分離の原則が記されているのです。

信教の自由を認めずに、主体性の無い宗教者が権力者に英雄像を投影し、権力者が宗教者に聖者像を投影する行い。つまり、投影した対象とそれぞれが同一化し、国家が神の代行を取り入れることで、戦争という悲劇が起こるのです。

この政教が同一化したカリスマ性が集団としての民衆にとり憑き、肥大化することにより、対象が極悪化(鬼畜米英)され、聖戦として正当化される過程で、人間は平気で人を殺します。

靖国は、ドイツのヒットラーを生んだヴォーダン元型と同じ特

質をもつ、我々の内にある一つの元型であることは否めないのです。(ドイツでは、ヴォータンというゲルマン民族の英雄的な神の象徴たる元型がドイツ民族に取り入れられ、同一化されたという事象がファシズムとして顕現しました。しかし、ドイツの戦後の援護法によれば、軍人・軍属以外の空襲被災者も同様の援護の対象であり、戦後補償の在り方は、日本のそれとは質的に異なることを我々は常に問題として捉える必要があります)次号に続く

■神道と仏教の関係④

6. 日本の民族性と民族支配

日本では、「八」は末広がり縁起が良いとされますが、これも日本独特の観念ではありません。八坂神社の「八」も、秦族スサノヲの八人の子どもを指しており、八幡神社をはじめ、八雲神社や八王寺神社の八もスサノヲ、つまり秦氏に由来があるのです。

西郷信綱が、仏教が重視する「八」すなわち八苦、八相、八識、八正道、八大竜王などは、記紀神話における大八島、八尋殿、八幡大神、八百万神などに流れを汲む点を指摘し、「その八幡神は、もはやたんなるむかしながらの日本の神ではなく、それが緊張関係をもつその異国からまさに伝来した仏法という普遍的宗教の洗礼を受けた新しい神であった」と論じていることから、古代日本において海の神、山の神が仏教を吸収し、体系化された過程が理解できます。

大和岩雄は、秦王国の八幡神祭祀族の本拠地に建てられた九州最古の虚空蔵寺や、香春山の銅や八幡信仰の鍛冶翁伝承とは無関係でなく、鍛冶・鑄造にかかわる人々の信仰を集めた職業的な「工

巧「神樂」的呪法（東洋版鍊金術）が虚空蔵求聞法であること
を指摘しています。

また、道慈どうじが虚空蔵聞持法を日本に伝来しており、額田ぬかだ氏の氏寺である大安寺は、聖徳太子の熊凝寺が前身であることから、百濟系でありながら道慈は新羅系秦氏と深い関係であったとされています。

以上のことから道慈は、現世利益をもたらす古代仏教における秦氏による習俗的仏教の流れを政治的神話に塗り替え吸収した、最も皇室に近い存在であったことが分かります。

アマテラスを女神とする『日本書紀』については、中臣大嶋と額田氏の道慈が関わり、アマテラスを男神とする『古事記』については、秦氏の関与が大和岩雄によって指摘されています。

一方のササノヲは、秦氏の鍛冶神である秦河勝に英雄神イメージを投影した英雄像です。

この英雄像を利用して、持統天皇の影に暗躍した藤原不比等が、漢氏と共謀して記紀の製作を指揮し、政治的中国神話を吸収することで、ササノヲをアマテラスの配下に置き、実際に秦氏ら地方豪族を支配したと考えられます。

また、不比等の娘の光明皇后はその名の通り、『金光明最勝王經』に深く帰依し、興福寺の西金堂にこの經に基づいた釈迦集会の場面を再現し、天童八部衆を建立しています。その当時興福寺に住んでいた道慈とは当然関わりがあったと考えられ、道慈が藤原氏配下の僧侶であったことがここでもわかります。

民族支配に強く反映していると考えられる神話における「天孫降臨」や「国譲り神話」、「国生み神話」などは、本来秦氏などの渡来人の間で伝承されてきました。

これらの説話を基に、強引に地方に土着した氏族を服従させる意図の下で、「神話覇権機能」が発現され、アマテラスを代表とする「天津神系」（百濟系渡来人や宮人集団、伊勢神宮・政治・祭祀・軍事・征服者・中央）とササノヲを代表神とする「国津神系」（新羅系渡来人や先住民族、出雲神社・生産者・土地の主・被支配者・地方）に二分された宗教的権威の産物があるのです。それぞれの説話は、二項対立の傾向を持つ王権神話に吸収したもので、この「分極傾向」から差別意識が発達していったと考えられます。

実際に皮はぎや手工業、芸能という実践に携わる民などは、秦氏を中心にした新羅系の土着民であり、秦氏が信仰した白山神社が被差別部落に多く存在することなどは、その後の被差別部落問題と深い関連があるとして沖浦和光や川上隆志によって指摘されています。

また、法然上人の母親が秦氏出身で差別されていたことから、差別の無い世界を映す浄土を求め、念仏の興隆に開かれていったという見方も有力です。

白山信仰の開祖である泰澄たいじやうの出自が秦氏であり、新羅の始祖が「白」と呼ばれる白日神である点、そして蚕による日光感精と関係があることから理解できます。これを裏付けるかのようには、神話ではササノヲが服屋の穴をあけ、生きた馬の皮を剥いで投げ込む行為に象徴され、皮はぎを生業とする民の象徴的なイメージを想像させ、卑しい行為として物語る記号化に照応していることは否めません。

道慈の出自である額田氏ぬかたが、湯坐部として皇室に仕え、馬の管理を担う神聖な祭祀的立場にいたことから、この朝鮮呪儀を基にした記号化、つまり神話化に寄与していたことが容易に推測できるでしょう。この事象は、前に述べた、弁財天の呪術性〔呪葉洗浴法〕を額田氏が担っていたことを意味しているのです。

それまで出雲の靈力が重視されていましたが、渡来系の藤原氏が台頭し、律令体制から荘園制に移行しました。その出雲の神話群が形骸化されると同時に伊勢神話に吸収され、出雲の靈力が内在化される過程の中、新羅系秦氏のシャーマンの役割と地位は没落しており、秦河勝は、播磨の坂越の生島に流されています。

また、秦氏が祀った若王子神社の碑文に「天照神力五大力王天照神力弁財天」と記されていることから、梅原猛は、元来秦氏が、朝鮮半島時代から信仰していた祖先神であると指摘しています。私自身この碑文を実際に見ていますが、全ての原初がここにあり、弁財天が示す意味も説得力があり、秦氏から権力者が祖先神を奪った結果に至る歷程の遺物として、ここに全てが集約されており、腑に落ちました。

アマテラス、スサノヲの二人の神話における姉弟関係には、地方豪族の代表格である出雲神話が天照神話に吸収され、天照の偉大さを誇示するために改作されたことはまちがいないと思われるます。これらの神は人間の支配的な現実世界を表現する物語の人物像であったのです。

湯浅泰雄によれば、仏教の「密教化」とは、すなわち神道と仏教の習合が進行する（仏教の呪術的儀式が民衆の習俗まで浸透し

ていく）過程を指しています。

言いかえれば、新羅仏教の段階ですでに「習俗化」された「私宅したく仏教」が、公伝以前に秦氏中心の渡来人によって伝わり、百濟ぶつぎょう仏教が、公伝以前に秦氏中心の渡来人によって伝わり、百濟ぶつぎょう仏教、すなわち「政治化」された「公伝仏教」との布置ふち（解説②）

により、仏教が「ヒンドゥー化」され、「退化」していった過程を指すものであります。両者を繋げた役割を果たしたのが密教です。

日本民族が、公式に仏教を受容したのは、古代国家の古代貴族層を中心とした渡来系宮中人です。その受容態度とは、既に「退化」の過程にあった中国の輸入仏教に対する呪術的な機能と、国家護持、国王神聖化を正当に流布するための吸収的な役割でしかなかったのです。

最澄も空海も国家仏教としての権力者の枠内に留まること、つまり政治に利用されることを余儀なくされました。これを補償する意味で鎌倉仏教における親鸞の改革性が発現されたのは当然のことと言えるでしょう。

親鸞の罪障性の背景には何が潜んでいたのかは謎です。しかし、これまでの仏教史観を案ずると、親鸞は藤原系統の出自であり、不比等と道慈らの歴史的過ちを自らの宿業として受容したようにも思えます。

少なくとも親鸞は、自らの宿業である「穢悪えあく」を慚愧し、本来の仏教の本質を取り戻そうとした改革者でした。穢悪の地頭に立脚し、権力者に依らない唯一無二の仏教者であり、仏教が退化する以前の仏教を求めた求道者であったことは確かでしょう。

権力を維持するための仏教と民衆の苦しみから生まれた仏法のあり方との本質の違いがここにあるのです。

上意下達を目的とした政治権力は念仏を制圧し、迫害したことから、権力者の偽善性は強まるばかりで真実としての価値には至りませんでした。

それは、宗教が政治と関わることによって真実性がゆがめられ、利用されることによつて権力者が絶対化され、独善者、独裁者として君臨する結果、聖戦とされた戦争によつて多くの命が犠牲になつた歴史が明らかにしています。また古代にイデオロギー化された差別心が現在に至つても発現していることも否めません。

政教分離の原則は十字軍の負の遺産を戒める態度であり、戦争を二度と起こさない為の人類が生み出した智慧なのです。この智慧を知らないうちに戦後を迎えた私たち日本人は、学び直し、この智慧を広めて往かなければなりません。合掌（次号に続く）

解説①末木文義士によれば、「もともとと本地垂迹という考え方は、中国の『莊子』などに見られる「迹」（現象）と「迹する所以」

（現象の根拠）という哲学概念に由来する発想で、仏教では、僧そう

肇じょう

が取り入れ、天台においても本・迹という対の概念は極めて重視されています。すなわち、『法華経』解釈において、その前半部

分の歴史上の釈迦仏の説法を伝える箇所が「迹門」、それに対して後半部分の永遠絶対の仏の出現を説く部分が「本門」と呼ばれています。平安期には、天台が仏教思想としてもっとも大きな影響力を持ったことを考えると、本地垂迹説の発展にもこの天台の発想が大きく寄与したのではないかと思われる」とあり、天台神

道理論が、神仏習合に見られる日本のナシヨナリズムに発展する基本理論になっていることが示されています。

解説②「布置」河合隼雄がユング心理学を日本に伝える際に用いた言葉で、「コンステレーション」。直訳すれば、星座という意味になります。普段何の意味も持ちそうにない事柄や事象があるときにそのひとつひとつがまとまり、意味を成すことを指します。その意味に気づいた際に「布置する」というのです。河合隼雄は「心の中と外的に起こることがうまく合致して、全体として何か、星座のようにまとまることを布置と呼んで、大切に考えている」と述べています。ある意味親鸞聖人の「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とある「業縁」とは結果を生む縁であり、布置同様のめぐり合わせとも言えるでしょう。



■西真寺 令和二年行事のご案内

新年会 二月二十四日（日曜日）十時より予定
報恩講 十月十二日（月曜・祝日）十時より予定